(C) Copyright 2000 System Creates Inc., All rights reserved

暁鐘の音 115

職人

「職人」という響きの中に、今日の日本人は何を連想するだろうか。周りの人に聞いても、大工や植木職人、タイル職人、鳶職など、だぜか建築や土木の仕事が出てくる。でも、大工は全員“職人”だろうか。鳶職は全員“職人”だろうか。そんなはずはない。職人というのは、一定レベルの技術があって、きちんと顧客の求める仕事ができる人のことである。ソフトウェア・エンジニアの世界にも「職人」と言える人がいる。

宮大工の棟梁に田中文男と言う人がいる。少し前の新聞のコラムに紹介されていたので、ご存知の人もいるかもしれない。もっとも、ソフトウェアの世界の人達は、あまりこのようなコラムは読まないようなので、見ていない人の方が多いだろう。その中に「職人の心得」みたいなのが幾つか紹介されていて、ソフトウェア・エンジニアにも当てはまる事なので、幾つか紹介する。

「一生食える職人技なんてない。職人は一生が修業」

我々、ソフトウェアの世界でも全く同じである。一〇年も経てば、新しい、そしてより合理的な方法が提案されてきたり、システムの基盤が変わってしまう。今回は何とか無事に仕事を終えたからと言っても、要求が変化する以上、次回の要求に応える事が出来る保証はない。だから、常に優れた人の技術を手に入れ、それを自分の仕事の中に同化していかなければならない。ちょっとでも立ち止まったら、この世界では置いていかれる。それが苦痛なら、この世界から立ち去ることだ。或は、「職人」をあきらめて、「手習い」で居るしかない。世の中には、もっと変化の緩い仕事があるだろう。ソフトウェアの世界はもっとも激しく変化している世界である。「変化」を楽しまなければ、とてもやっていけない世界である。

「世の中じゃ 百点とらなきゃゼニもらえん」

ソフトウェアの仕事も、昔は、最後に顧客に気に入ってもらえなければ、契約の全額はもらえなかった。納期遅れや、仕様の実現漏れなどは、減額の対象かタダで治さなければならない。それよりも、そんなことになったら、次に予定している顧客の仕事に取り掛かれない。だからこの世界の厳しさはある意味では当たり前のことであった。顧客も仕様をまとめるのに真剣であったし、こっちの見積りも必死でやって来た。だが、派遣法が出来てから、事情は大きく変わってしまった。お互いに甘えが生じてしまい、六〇点でもゼニがもらえてしまう。社員の給料と同じ感覚で、支払われるようになった。それは、エンジニアの質を落とすこと以外に寄与しなかった。

「職人はばかでできず、利口でできず、中途半端でなおできず」

我々の世界では、次々と出される文献や技術雑誌を読んで追いかけなければならない。だから、基本的には、そのような本が読めて、知識の結合が出来ることが条件になる。それとは別に、「センス」と言うものもある。初期のころは、センスで意外と結果が出せることがある。あるいは、利口な人は要領良く振る舞えたり、自分にかかってくる先の負担を予想できるたりして、素早く楽な方を選んでしまう。言い換えれば、出来ない理由が簡単に並んでしまうのである。だから、新しい技術や工夫が身に付かない。

「週四〇時間」の問題も、“そうありたい”と言うだけで、徹底しないために実現しない。我々の世界は、日進月歩である。だから、自分の時間を全て「仕事」で使ってしまえば、新しい技術を追うことができなくなる。でも、“そうありたい”と思うだけでは実現しない。“何としてもそうする”ためにどうするかという工夫が命がけで行われるかどうかである。もちろん、そのために、一時的には自分の持ち時間の多くを勉強に投入することになるだろうが、“徹底”が思う方向に導いてくれるはずである。

「やっちゃいけないことをいくつ知っているかが、職人として重要なんだ」

これも、我々の世界にそのまま当てはまる。時間が足りないからと言って仕様をまとめる作業を省いたら、却って時間がかかってしまう。時間が無いと言ってテストを省けば、ほとんど間違いなく納期遅れになってしまう。これは、“やっちゃいけないこと”として多くの人が何度も経験していることなのに、その時になるとまた“時間がないから”といって繰り返してしまう。モジュールの尺度という観点からも“やっちゃいけない”ことは幾つかあるし、レビューで資料を事前に配布しないことも“やっちゃいけない”ことに入る。合理的な根拠もなく、ソースコードの実装に着手してしまうのも“やっちゃいけない”ことである。

◆　◆

このように、宮大工の「職人の心得」は、我々ソフトウェアの世界でも殆どそのまま通用するのである。二一世紀、タダの職人では仕事は回ってこないはずだ。そのような時代が、日本にも来ると思っている。いつまでも、「アマチュア」で通用するはずが無いと思っている。■

今月の一言

「読書とは他人にものを考えてもらうことである。一日を多読に費やす勤勉な人間はしだいに自分でものを考える力を失っていく」 ショーペンハウエル

ようやく長かった夏が終わったかと思ったら、一気に秋の気配である。夕方の五時過ぎには、すでに薄暗くなってきた。可哀想に、今年は「ツクツクボウシ」が出る幕を失ったようだ。もう一つ、オリンピックのせいか、本を読む時間が減っている。

岩波文庫から「読書について」（ショーペンハウエル）という小さな本が出ている。時々、自戒の気持ちからこの本を読み返すが、今回のテーマも大事にしている言葉である。「読書」それ自体は、自分の思考が動いているわけではない。著者の頭の中を散歩しているだけである。ショーペンハウエルは、それを「他人にものを考えてもらうこと」と表現した。その中で、同意したり感激したり驚いたりしているだけかもしれない。本来、考えると云う行為は「独」である。この「独」を活用できるかどうかである。

読書は、考えるきっかけをもたらすものであって、主体は読者側になければならない。考えたこともない論点が提供され、それを契機に「自分」で考えることができなければならない。その意味では、新聞や雑誌も同じだし、今日では、インターネットのHPから得られる情報も同じである。それらは、あくまでも考える契機であって、著者に思考を預けてしまってはならない。新聞やどこかのHPにこう書いていたからといって、自らの思考を放棄してはならない。その意味からも、「多読」は、単に何もしない「時間」の不安や恐怖から逃れるための行為になってしまう危険を孕んでいる。